

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 江川純一

本論文はイタリア宗教史学と呼ぶべき学統を確立したラッファエーレ・ペッタッツォーニ(1883-1959)に関する本邦初の本格的な研究である。ペッタッツォーニはエリアーデと並び称される宗教学・宗教史学の大家であり、独自の宗教史学観に基づいた彼の学問は、同時期に欧米諸国で展開した宗教学・宗教史学・宗教人類学等と並行しつつも、固有の性格と意義を有している。しかし、名声の高さにもかかわらずイタリア以外では本格的に研究されることは稀で、学史上の適切な評価もなされていない面がある。江川氏はこの欠を補うべく、二年余にわたるイタリア留学、とりわけペッタッツォーニの故郷サン・ジョヴァンニ・イン・ペルシチエートの市立図書館にあるペッタッツォーニ資料室での膨大な著作調査などに基づいて本論文を完成させた。彼の宗教史学の全貌、および学問的性格を、二十世紀初頭から中葉にかけてのイタリアの精神史、宗教史、政治史的コンテクストに置き入れて解明するという方法論上の基本視点に立つ本論文は、近代宗教学の基礎にある「宗教」概念自体の近代西欧的構築性を反省的に検討するという近年の宗教研究における重要な動向に呼応するものでもある。

論文は九章から成り、ペッタッツォーニの詳細な著述目録および年譜を付す。二十世紀前半のイタリアでペッタッツォーニが独自の宗教史学を樹立しえた条件として、①「宗教」という一般概念の成立、②宗教研究方法論の確立、③学の世俗性の保証(教会神学からの独立)、④学の制度的保証(アカデミアにおける宗教史学講座の創設)の四条件を設定し、彼がどのような状況下で、またどのような経緯でこれらを獲得していったかという観点から、その活動の諸側面が検討、分析されていく。彼の学問的出発点における「モデルニズモ(近代主義)」と「ストリチズモ(歴史主義)」の性格規定(第一章)、処女作『サルデーニャの原始宗教』における考古学から宗教史学への展開の経緯(第二章)、最も著名な業績である「最高存在」研究の紹介、およびキリスト教的宗教観と結びついていた宗教学及び民族学説「原始一神教説」との対比的検討(第三章、第四章)、クローチェ、ジェンティーレ等、当時のイタリアの主導的知識人・政治家との交錯とファシスト政権下でのローマ大学における宗教史講座創設の経緯の解明(第五章、第六章)、戦後期における「宗教現象学」学派との親和性と異質性の指摘(第七章)、重要な後継者デ・マルティーノによるペッタッツォーニ宗教史学の受容と変容の追跡(第八章)、ペッタッツォーニ宗教史学を貫く基本理念としての「宗教的自由」の意義の闡明(第九章)、がその主要論点である。

これら諸観点の通覧によって本論文は、歴史的文脈を越えての諸宗教現象の比較を重要な方法とする近代宗教学に対して、あくまで個別宗教史の文脈の中でこそ宗教を研究すべきだと主張し、その上で宗教現象学や比較宗教学との接合を図るペッタッツォーニ宗教史学の基本的構図が、彼の立場の微妙な動揺とともに丁寧に捉えられており、今後のペッタッツォーニ研究の基礎を据えるものとなっている。宗教学・宗教史学の方法論に関する現代的再検討に資する意義も大きい。ペッタッツォーニへの批判的視点が十分でない点にやや不満は残るが、宗教学・宗教史学史上に重要なこの人物の業績の全体像と意義を明らかにした成果は揺るがない。よって審査委員会は、本論文を博士(文学)の学位授与に値するものと判断する。